

涅槃の地で

昨年の暮れ、北インドの仏教遺跡をまわった。千葉県市川市にある浄土真宗本願寺派中原寺の企画した旅行に、作家の青木新門さんらとともに参加したのだ。

釈尊入滅の地クシナガラでは、涅槃堂を見学をしたあとで夕方の自由行動になった。仲間と金色に輝くミヤマ寺を見学していくと、隣に小学校があった。校庭の片隅には小さな黒板があり、机と椅子が並んでいる。

校門の横には、英語とヒンディー語で「インド・日本 女性の会」という看板がかかっている。「何だろう」と話し合っていると、奥からサリー姿の先生たちが出てきた。最後に現れた小

南	無
善	財

菅原伸郎

柄な女性が「日本からですか」と話しかけてきた。加藤裕子さんという方で、ここで職業訓練所を開いているとのこと。その出会いがまったく偶然だったので、私たちはうれしくなった。翌朝も訪ねて話を伺うと……。

商社マンだった夫に先立たれた加藤さんは二十年ほど前、仏教遺跡をめぐるツアーに参加した。クシナガラなどで子どもたちの境遇を見るうちに、何かできることはないか、と考えるよう

になる。識字率が五割程度という実状を知るにつれ、未来は教育によるしかない、と思い至った。

同志を募って、まずは校舎建設の費用を送ってみた。しかし、壁も多くあつて願いはなかなか届かない。現地へ通ううちに、女性たちから「ここに任んで、助けてください」と頼まれる。女性の地位を向上させたい、という願いも伝わってきた。小学校の一角を借り、一九九五年に低カーストの子どもや女性のための無料職業訓練所を開いた。最近では自宅のある大阪府八尾市とインドとを年に四回ほど行き来し、半年は現地で過ごしている。

ミシン二十台を使つての洋裁教室は週の前半が初級、後半が上級のクラス。編み物教室や刺繍教室も日替わりで開いている。いま、在校生は約二百

人。これまで約七百人が巣立っていった。全生徒にヒンドゥー語と算数の学習が義務づけられている。二〇〇三年には希望者のための日本語学級も開設し、ブッダの歴史を教え始めた。

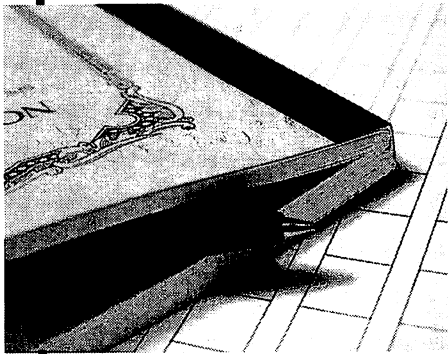
もともとは禅宗寺院の家柄である加藤さんは毎朝、近くの涅槃堂で般若心経を唱えてから出勤する。「中国大陸で生まれ育ち、敗戦で残留孤児となったのですが、朝鮮など、少数民族の人たちに助けられました。その温かさに関心したく、残りの人生をこの地に捧げようと思ったのです」

NGO団体「インド・日本 女性の会」が、私財を使って活動する加藤さんを助けてはいる。「しかし、それにしても、大変ですね」と中原寺住職の平野俊興さんが語りかけると、ほほえんで「でも、ここは物価がとても安

い。日本の方が心配なさるほど、お金はかかりませんのよ」と答えた。

インドの仏教遺跡を訪れる日本人は、どこでも物売りや物乞いの群れに悩まされる。初めのうちはお金を渡し、きりがない。いつしか「これでは、きりがない。もつと根本的な解決はないのか」と考えるようになる。

私たちがクシナガラの町を後にし



て、片田舎のドライブインで休憩したときのことだ。十歳くらいの少年が道路わきで元気に靴磨きをしていた。十ルピー（約二十五円）を払って磨いてもらったあとで、私たちは口々に「あの笑顔は本当に明るかった。やはり、働くことの大切さを知ってもらうことが一番なんだね」と語り合った。

「職業訓練と識字教育」という加藤さんの試みも、そうした思いから始まったのかもしれない。

◇

（すがわら・のおお／ジャーナリスト）
「インド・日本 女性の会」は〒581・0038八尾市若林町1の44の2の712、加藤方。電話0729・49・6195。年会費六千円、郵便振替00980-4-4241、Lady's Society。
E-mail:kushinagar@jeto.eonet.ne.jp